

月山富田城跡

月山富田城は、戦国時代（1467-1615）に出雲国の政治・文化の中心地であった歴史ある城砦です。典型的な山城で、斜面と山頂を石垣で囲んであります。山の中腹あたりに屋敷が建てられ、山頂が最も守りの堅い区域でした。この城は戦いで破壊されたことはありませんが、現在は石壁とその他の遺構のみが残り、全体が手入れの行き届いた公園となっています。

包囲攻撃

月山富田城の最初の建造物は12世紀に築かれたと考えられています。1439年から1566年までは有力な大名である尼子氏の居城であり、日本一の難攻不落の城とされてきました。尼子氏の支配のもとで城郭は拡張され、山麓の川沿いの城下町は栄え、約1万人の人口を抱えていました。1470年頃から、月山富田城は敵対する大名の攻撃を繰り返し受けました。多くの直接的な攻撃は撃退されましたが、尼子氏は1566年に1年に及ぶ包囲の末、降伏して城門を開きました。その後、1611年に松江藩大名・堀尾忠治(1599-1633)が月山富田城から松江城に本拠地を移したことで廃城となりました。

巧みな地形利用

月山富田城の構造や設計には、山の自然の地形と川に面するという立地が、最大限に防御に生かされています。富田川と月山の間に細く広がる城下町は第1防衛線とされています。大規模な攻撃は川から行われると予想されていたため、城下町では数百人の武士が壁付きの建物に配置されました。幅広い堀が城下町と山および城の境界となり、壁に設けられた4つの門で城郭内への立ち入りが管理されました。残念なことに、1666年の大規模な洪水のため城下町のほとんどは失われ、元々の城下町のほとんどは今日もう見ることはできません。

防衛区画

月山富田城は大きく2つの区画に分かれていました。低い方の区画は、幅広く比較的なだらかな標高の低い斜面に作られました。高い方の区画は、190メートルの山頂付近の細い尾根に作られました。これらの区画は急な斜面で隔てられ、登るには1本の固く守られた7回方向転換する道を通る他ありませんでした。

山頂の区画には、石壁でさらに区切られた廓が、尾根に沿って3つ並んでいました。1つ目には3階建ての防衛のための櫓と固く守られた1つの門があったと考えられています。3つ目の最も高い廓、つまり本丸は、急な天然の堀切でその他から仕切られていました。さらに尾根に沿った山の最も頂上の部分には、城の守護神を祀る勝日高守神社

があります（ただし神社の方が城より先にあったと考えられています）。これらの頂上の郭から眺めると、東から西まで幅広く見渡すことができ、北には中海から日本海、東には大山までを見ることができます。

下側の区画では、元々比較的平坦だった部分の多くが、天然の堀で区切られた壁付きの高台となり、それらが歩道でつながれました。これらの中で最大かつ最重要だった御殿は、山の中腹付近にありました。ここにあった御殿の主要建築物群は櫓付きの高い石の壁によって固く守られ、守られた屋根付きの門からしか近づくことができませんでした。

珍しい城の詳細模型

1611年に廃城となった後、敷地の大部分は自然に還り、平坦な高台の多くはその後の年月をかけて農業に利用されました。数百年後の1934年には国の史跡に指定され、2006年には日本の名城100選にも選ばれています。月山富田城への関心が高まったことをきっかけに、2014年には大規模な修復・整備計画が策定され、2019年に完成しました。城址の入り口にある安来市歴史資料館には、月山富田城や城下町を詳細に再現した大型模型のほか、出土品や地図などの歴史資料が展示されています。